

3. 終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想 —「皇軍」における「兵要地理」のあり方と応用地理学の立場—

石井素介

編集者の注

石井素介先生（明治大学名誉教授・日本地理学会名誉会員）より、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』（2005年）について問い合わせをいただいたのは、2008年5月下旬のことであった。石井先生は終戦直前に「研究動員学徒」として参謀本部に通勤されていたことがあり、渡辺正氏もご存知で、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』に関心を持たれたとのことであった。さっそくその他の外邦図関係の出版物もあわせてお送りしたところ、お手紙をいただいた。またお宅にお電話して、外邦図研究会で講演していただくようお願いした。石井先生は、参謀本部勤務のほか、1944年には旧満州で調査され、是非その頃のことをうかがいたく思ったからである。このお願いは無理とのことであったが、ここに掲載する「終戦前後の参謀本部『研究動員学徒』時代の回想—『皇軍』における『兵要地理』のあり方と応用地理学の立場」をお送り下さった。

1945年4月30日の兵要地理調査研究会に参加されていた石井先生は、その前後のことを詳しく回想され、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』を別の角度から見直すだけでなく、地理学出身の「研究動員学徒」の研究内容までご紹介いただいた。たいへん興味ぶかい内容で、次回の外邦図研究ニューズレターに掲載させていただきたいとお願いしたところ、快諾していただいた。

『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』や外邦図研究ニューズレター3号、4号に掲載された佐藤久先生の回想（一部を『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』[大阪大学出版会、2009年2月]に再録）とあわせて読んでいただきたい。

（小林 茂）

毎年夏の8月15日の頃になると、終戦前後の話題がマスコミでよく取り上げられますが、それとは別に、敗戦から60年以上が経過した近年は、ようやく何かの呪縛から解放されたかのように、日本が戦争をしていた最終段階、つまり第二次世界大戦(いわゆる「大東亜戦争」)の終末期の日本がどんな状況であったのか、そしてまた、戦前から戦後への移行が果たして「断絶」それとも「連続」の何れだったのか、などの問題について改めて見つめ直そうとする動きが各方面に出てきているようです。しかし戦後の60余年の間、世界の各地で起こっている大小の戦争を見聞きしてはいても、直接自分に係わる戦争を体験しないまま過ごしてきた人々が人口の大多数を占めるようになった今日では、「終戦」といっても遠いよその国の話のようにもなるとしても無理はないでしょう。その意味でも、戦時中のことを掘り起こして正しく後世の人々に伝えることは、とりわけ今日強く望まれているのではないかと思います。

そうした状況のもとで、地理学の世界でも、かつての戦争と地理学はどんな関係にあったのか、軍隊が作成した地図やいわゆる「兵要地理(誌)」とはどんなものだったのか、などについて改めて見直してみようという動きが出てきたのは、まことに結構なことだと思います。

その動きの一例が、戦時中に日本の軍隊(主として「陸地測量部」)によって作成された海外植民地等の地図類、いわゆる「外邦図」の利用・評価に関する研究グループの結成であり、またそれに関連して出てきた、一部地理学者の軍部への協力の問題についての検討の動向がそれです。地理学や地図学がたどった歴史の中でも言わば影の部分に置かれてきた、この戦争や軍部への協力という問題については、確かにこれまでは言わばタブーのように扱われていて、誰もが事実上研究対象にすることを避けてきた問題でした。当時のことを知る主な当事者たちの大部分が何も語らないまま世を去ってしまった今日、残されたわずかな記録や史料から事実を掘り起こすのは容易な業ではないと思われます。それだけに、改めてこれを客観的な視点から新しい研究課題として取り上げる研究組織が結成されたこと自体は、大いに

意義のあることだと言えるでしょう。

ただその場合には、十分に練られた多面的・科学的でかつ批判的な史眼が要求される、ということを決して閑却してはならないでしょう。戦時下の諸現象に対しては、とかく現代の価値観から、記録の字面だけに拠りながら一方的に論断する傾向に陥りがちだからです。さらに踏み込んで言うならば、いわゆる「国民精神総動員体制」のもとで、何処にも「逃げ場所(Asyl)」の与えられていなかった当時の日本に生きていた人々の行動を、現代の「安全地帯」に生きている私たちが、安易に一面的に都合よく価値判断してしまうのは、余りにも問題があり過ぎるのではないかと思うからです。

私自身の場合について言えば、私は終戦の当時、ようやく学問の世界に足を踏み入れたばかりの修行中の学生として、参謀本部というまさに軍部の中枢機関の末端部に偶然居合わせた経験を持っています。そこで、この60数年前の、ほとんど消えかかった記憶を頼りにしながら、当時の現場の状況をできるだけ誤りの無いように若い人々に伝えるべく努力してみたいと思っています。

しかし、回想というものは、まさしく「玉ねぎの皮をむく」ようなもので、時には眼に沁み肌を刺すところがあります。自分でも無意識のままに、ややもすれば好都合な解釈に向けた面ばかりを強調することになりがちで、後になって自責の念に苛まれるようなことにもなり兼ねないからです。そうした自戒を込めながら、以下に私なりの体験記を試みることに致します。

1. 「外邦図」研究グループの活動に接して

2008年の6月になった頃、たまたま大阪市立大学から送ってくれた同大学発行の人文地理学関係の雑誌『空間・社会・地理思想』の第11号(2007年12月)を見ていたところ、終戦前後に大本営参謀本部に勤務していた渡辺正少佐の所蔵資料集のことが注記に引用されているのを発見して驚きました¹⁾。この人は、私が短期間そこに動員され通勤していた当時に時々顔を見たことがあり、特に参謀将校の中では地理学の学者や学生の動員に熱心な人として評

判になっていたからです。その頃、つまり終戦の前後に私が「研究動員学徒」として参謀本部で働いていた時代のことは、漠然とした思い出としてある程度記憶に残ってはいるものの、頼りになるような記録は何ひとつ残ってはいないのです。単なる思い出の短文として当時のことを一二度書いたことはあるのですが、何かもう少し確実な手掛かりになるような記録は出てこないものかと、かねてから探していたのでした。そこで早速、その『渡辺正氏所蔵資料集』（渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005）の発行元である大阪大学の人文地理学教室に手紙を出して送ってもらうことにしました。

そうして届いたのが、大阪大学文学研究科人文地理学教室発行になる『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集—』ならびに『外邦図研究ニューズレター』（No.1~No.5）（大型 A4 判）のワンセットでした。これらは、予想の通り大変興味のある内容で、特に幾つかの部分は私自身の体験した通りの内容が記述されており、記憶を新たにさせられる思いで読んだ所や、当時身近にあった出来事でありながら全く知らなかった事実を教えられた部分もあり、興味津々たる思いで読ませてもらいました。

この報告書シリーズは、もともと、国内の幾つかの大学の地理学教室に保管されてきた、いわゆる「外邦図」（これは旧陸軍の陸地測量部等が、旧植民地のほか、アジア大陸や南方諸地域を対象に作成した地図類で、終戦直後に参謀本部の地下倉庫から国内の幾つかの大学・研究調査機関に搬出・保存されているものを指すものです）が持つ日本の地理学史・地図学史上での重要性に着目した研究グループが、大阪大学の小林茂教授を中心として組織的に進めてきた調査研究の報告書です。その内容のうち「ニューズレター」の方は、2002年度以降の各年度のメンバーの調査研究活動の記録と、関係のある長老研究者を招待しての回顧談聴取を含めて開かれた数回の研究会の報告を収録したものです。

これらの記事中特に興味を引かれたのは、東京大学名誉教授の佐藤久氏が戦時下の東大地理学教室や当時の教室主任であった辻村太郎教授の動向について手帳日誌の記録等を含めて詳細に語っておられる部分（佐藤 2005, 2006）や、また参謀本部からの地

図類搬出を当時直接担当された地理学者の中野尊正・三井嘉都夫・岡本次郎の各氏らの生々しい思い出話（中野 2004；三井 2004；岡本 2008）でした。

一方、前記『渡辺正氏所蔵資料集』には、メンバーの一人で永年国土地理院に勤務されていた金窪敏知氏の人脈を通じて偶然紹介され寄贈を受けることになった渡辺正氏（元大本営参謀・陸軍少佐）の資料集の本文と解説論文数編が収録されています。資料集の内容には、戦争末期に計画実施された「兵要地理調査研究会合ノ件」、終戦時の秘密書類の焼却処理に関する件、陸地測量部組織の処理と内務省地理調査所設立に関する資料等が含まれています。

このうち「兵要地理調査研究会合」というのは、1945年4月30日に市谷の参謀本部内の会議室で数名の地理学者と参謀本部第二部参謀たちとの合同で開催された研究会のことで、この会合には偶然、私自身も当時はいわゆる「研究動員学徒」の一人として参加していたのです。会合の場面、とりわけ辻村太郎教授と酉水（すがい）孜郎氏の二人が研究報告を発表された場面については、不思議なくらいありありと鮮明な記憶が残っているのですが、ノートや文書記録は何も無く、何かこの記憶を確かめるための資料は無いものかと、かねがね探していたのでした。

この研究グループの主要な研究対象である「外邦図」そのものについては、実は、私自身はこれという因縁も知識も無いので、この研究グループのお役に立つような情報提供はあまり期待できないのですが、終戦前後という時期に当時の日本の地理学者が軍部と直接の接触を持つことになったこの稀な場面に、偶然とはいえ私自身が直接居合わせるようになったというこの不思議な体験を、一体どのように自分で納得し決着をつければよいのか、改めて考え直すきっかけを突きつけられた様に感じています。

それはともかくとして、これらの報告書と研究ニューズレター等の資料全体をあらまし通読して感じたことの第一は、良くぞこれまでタブーのように放置されていたこの珍しい、しかも大変重要な問題が、ひとつの研究テーマとして真正面から取り上げられるようになったものだという点です。しかもその研究態勢の面においても、関係の諸大学や諸機関の研

究者の人々を組織的に糾合して、内外の各地に蓄積されていた地図や空中写真についての情報が発掘収集されているばかりでなく、各方面の先輩格の当事者の方々の貴重な証言や文書資料を発見し記録に残す努力が重ねられていることをも含めて、とにもかくにも、まことに敬服の至りと言わねばなりません。

私自身も、以前から本当はこうした分野の研究が必要なのだが、と痛感してはいたのですが、特別の契機もまた組織的研究を実行に移す能力の欠如もあって、無為に過ごしてきました。現役を引退して後久しい現在となつては、もはやこれらの研究に積極的に参加するのはとても無理ですが、多少とも何かお役に立てることがあれば、協力の労を惜しむつもりはありません。ただ、この貴重な資料が提供してくれる様々な情報を読みながら、これらを自分の中でどのように了解し消化すればよいのだろうか、といろいろ考えさせられる点が多く、まだ良くまとまりませんが、以下にそうした感想の一部を述べてみることに致します。(以下に、まず大阪大学の小林茂教授宛の礼状として記した文章の一部を再録することにします。)

先ず最初に、この「外邦図研究グループ」本来の主たる研究対象である外邦図とその運び出し(軍から諸大学へ)の一件についてのことですが、私自身が事実上ほとんど無関係であったために、この件に関しては、残念ながらあまりお役に立つような情報提供ができないことをお断りしなければなりません。というのも、私が当時大本営参謀本部に研究動員学徒として通っていたのは、1945年の4月下旬から8月17日頃までのことで、その後はしばらく東京を離れることになったりしたので、その後の事情や東北大学・資源科学研究所等への「外邦図」搬出の際の状況等については、大分あとまで全く知らなかったからです。

ただ、今回関係の資料を通読してみて、また当時の知人の内何人かの人々の人間関係等から推理してみて、外邦図搬出の前後事情に関して最も正鵠を射た記述だと見られるのは、『外邦図研究ニューズレター』No.5に出ている岡本次郎氏の報告(岡本 2008)であろうと思います。ことにその最後の方で(岡本

2008: 46) 岡本さんがまとめておられるように、この外邦図搬出が実現したのは、まず当時東北大学在籍であった田中館秀三教授と渡辺正少佐との間の親密な人脈関係の存在と土井喜久一氏の実行力との結合によって東北大学行きの方が実現されたのが第一段階で、次いでこの望外とも思われる情報が土井さんを通じて多田文男教授に伝わり、それが中野尊正・三井嘉都夫氏等の尽力によって第二段階の資源科学研究所行きの方として実行されるに至った、というのが実際の経過に近いのではないかと思われることです。

私自身の場合、その当の参謀本部に数ヶ月間も通っていたのですが、動員期間の終わりまで「外邦図」等の集積場所の存在を全く知らず、残念ながらそこに行つたことも無いまま終戦を迎えました。ただ、終戦直後の室内片付けや焼却作業の手伝いをしていの際、自分で作業した地図の類や、廊下等に集積された不用物からは何でも好きな物を選んで持ち帰っても良いぞと言われたので、リュックに詰めただけ詰め込んで二、三回下宿へ持ち帰るのが関の山でした。リヤカーなど運搬手段を使えばもっと大量に持ち出せたのですが、当時はそんなことまでとても頭が回らなかったのが実状です。終戦直後という時点のことを考えてみると、上記の第一段階のような離れ業が実現されることになろうとは、大抵の人々には夢にも思い付かなかつたことでしょう。その時リュックに入れて持ち帰った資料は、拙宅の何処かにあるはずなのですが、すぐには見つかりません。そのうち探しておくつもりです。

次に、私の体験と直接結びつきがあるのは「渡辺正氏所蔵資料集」とその解説・解題を収めた『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』の中にある「兵要地理調査研究会合ノ件」の部分(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005: 67-69)です。この会合には私自身、4人の「研究動員学徒」の一人として陪席参加したことをはっきり記憶しています。4人の一人は、巻頭の写真図6の「第一次参集者芳名」の最後に鉛筆書きで追加されている吉川虎雄氏で、東大助手と書いてありますが、正しくは佐藤久氏と同じく(学年は一級下)当時のいわゆる特研究生(大学院特別研究生)でした。他の3人は地理学科の学部学生で、金崎肇(3

年生)、戸谷洋と藤井(石井の旧姓)素介(共に2年生)でした。吉川氏は正規のメンバーとして、他の3人はお前らも来いと言われて陪席したのだと思われます。したがって私たち学部生3人には何の責任も事後の宿題もなく、大学のゼミを傍聴するような気分で参加していたのを覚えています。

参加者の顔ぶれに関しては、記憶が明確ではありませんが、地理学界からの参加者は、渡辺少佐の記録にある13名というような多人数ではなかったという記憶が残っています。新井浩・矢澤大二両氏は棒線で消されている通り欠席ですが、他の人々の中にも出席しなかった人がもっといたかもしれません。いずれにしても、この名簿は参集依頼の予定表であって、参集をどんな方法で依頼したのかという点や、実際の参加者が誰であったのか等について、なお確かめる必要があると思います。

研究会合の内容についても、『所蔵資料集』巻頭の写真図5にある「豫定表」にはこまごまと時刻を区切って予定の議事が書かれていますが、実際はそれほど時間的に切迫した会議の雰囲気ではなく、普段の大学での合同ゼミの場合と同様に、報告の発表と質疑応答という調子で進行したような印象が残っています。むしろ、明瞭に記憶が残っているのは研究報告の内容で、主報告者の辻村太郎教授は、太平洋の火山列島とその周囲にあるサンゴ礁形成の地形学的特徴についての詳細な報告、副報告者の西水孜郎氏(企画院の組織変更に伴い当時は内務省国土局計画課所属)は、日本の食糧自給の可能性についての統計グラフを使った報告でした。これらの発表は、至極まともな普通の研究報告で、やや啓蒙的な内容のものでありましたが、とりわけ戦争のために直接役立つような「兵要」地理的な独自性を持つというほどの内容ではなかったと思います。もちろん、その場に出席していた参謀将校の側からは、幾つか兵要地理に関連した質問があったと思われるのですが、そのあたりのことはほとんど記憶に残っておりません。あるいは私たち学部学生の場合、午前中にこれらの報告を聞いただけで解放され、午後の部には出席しなかったのかもしれませんが。

このときの研究会合についてこれだけ明瞭な記憶があるのに、残念ながら何ひとつ記録もメモ書きも

残っていないのは、それから約ひと月の後、1945年の5月25日夜の空襲の際、当時住んでいた千駄ヶ谷の親戚の家で焼け出され、着ている服以外の蔵書やノート・アルバム等持ち物一切を失ってしまったためではないかと思われます。その点、『外邦図研究ニューズレター』No.3、No.4に掲載されている佐藤久氏の研究報告「地図と空中写真、見聞談、敗戦時とその後(正、続)」(佐藤2005,2006)の丹念な記録と記憶に基づく記述は、薄れた記憶を蘇えらせ、また知らなかった事実を教えてくれる貴重な証言だと言えるでしょう。ことに(続)の方の昭和20年代前半についての記述は、読み物としても興味津々でした。

特に、No.4の報告中の小見出し「空襲の本格化と二つの講演会」の部分(佐藤2006:54-55)で書かれている二つの講演会(1945年1月27日の学士院での会と2月中下旬頃の参謀本部での会)については初耳でした(学生が参加するような会ではなかったのでしょうか)。とりわけ後者の会の持つ意味は重要で、恐らくこの会合がきっかけとなって同年4月以降の参謀本部への「研究動員学徒」派遣が実行されることになったのではないかと思われます。

当時、諸学校では工場等への動員が全般化していましたが、帝国大学ではまだある程度授業が行われ、一部の学生が軍の気象部や陸地測量部(佐藤久氏等)へ時々出向く程度だったようですが、1945年4月からははいよいよ2年生以上は各所へ動員で出されることになったわけです。それでもなお、私の1年下の学年(西川治・高崎正義等の諸君のクラス)はまだ授業が残っていたようで、佐藤久氏の記述の続きによると、「この年度には辻村先生の「戦争地理学」と題する講話とゼミを折衷したようなコマ(単位外)が開設」されていたと書かれています。しかも、「そこで耳慣れた話材」である「飛行場立地と地形」の話がこの2月の講演会で報告されたようなので、「戦争地理学」と言ってもその程度の話だったことがわかります。

また、前述のように1945年4月30日の「兵要地理調査研究会合」で私が聞いた辻村太郎教授の講演は、太平洋の火山列島とその周辺にあるサンゴ礁形成の地形学的特徴に関するものでしたが、これは佐

藤久氏が報告の前段（佐藤 2006: 48）で触れている1943年11月25日夜の学士院での公開講演会における演題「太平洋地域火山の地理」の内容とほぼ同じもの（あるいはそれに多少兵要地理的考察を加えたもの）だったのではないかと思います。これは私たちが講義や土曜日のいわゆる「アーベント」談話で耳慣れた辻村先生得意のお話でした。

本土空襲が本格化し、米軍上陸による本土決戦が焦眉の課題となっていた時期である、この1945年4月末の「兵要地理調査研究会合」は、佐藤久氏も正直に繰り返し触れておられるように、「もはや、いまの段階になってこんなことを・・・と、掛声のみが勇ましい本土決戦の前途が暗く見えた」（佐藤 2006: 58）とか、「参集者の間にも、今となっては遅いんだヨナ！の空気が流れていた」（佐藤 2006: 65）というような気分の下で開催されたものだったことは否定できないでしょう。

もともと、兵要地理という教科は永年にわたって陸軍士官学校などの軍学校の正式科目として取り上げられていたもので、士官学校で実際に使用されていた教科書を戦後見せてもらったこともあります。こうした教科としての兵要地理？は内容的には自然地理学概説のようなもので、その章節ごとに応用的解説が加えられたものだったように記憶しています。これは戦前の中等学校で一般に使用されていた「軍事教練必携」などと比べても、むしろ「軍人勅諭」や「戦陣訓」などに見られる精神主義を省いた「理科的」な感じのものでした。

研究グループの中で、とりわけこの兵要地理に関連する分野の研究に集中的に取り組んでこられた共同研究者の故久武哲也教授がもしも元気で居られたら、私も多少はご協力することも出来たかもしれないのに、と残念でなりません。有力な後継者の方々が出てくることを期待しております。

ただ、この分野の研究には、公式的な文書記録のみでは判断しきれないような側面、例えば軍部や行政の官僚組織の側における科学的研究成果の受け入れ方などの側面についても、特に欧米のケースとの国際的な比較の場合にはとりわけ十分に検討して見る必要があるのではないかと思います。日本の地理学界の場合、行政の実務の方面との交流が少ないの

で、この点が少し気がかりです。

以上の記述は、終戦前後という特殊な時期に、参謀本部という特殊な場所に動員されていた極めて異例の体験を、自分自身でどのように受け止めるべきか、改めて考え直してみたいと考えて、先ず、漠然とした記憶のみによる憶測を避ける意味で、さしあたり自分と直接関係のあった事項を、今回提供された記録資料と記憶とを対比しながら、改めて確認してみることに限定しつつ書いたものです。

この「外邦図」研究グループの主要な研究目標である「外邦図」そのものの保存・管理・活用の面に関しては、東北大学・お茶の水女子大学・京都大学・広島大学等の地理学教室の間で共通のデータベースを構築し、その公開利用をも可能にするようなシステム作りが行われていて、その組織的取り組みについては大いに感銘を受けるとともに、一日も早い成功を期待しています。

他方、いわゆる「兵要地理（誌）」の問題、つまり地理学と軍事面との関係の歴史をどのように取り上げ深めていくかという課題については、なお十分な検討を要する問題が多数控えているのではないかと考えるので、以下にまとめて取上げることとします。

2. 終戦直前の参謀本部「研究動員学徒」時代のこ と

次にこの節では、上記の戦時下における「兵要地理（誌）」をめぐる問題の背景を探るために多少とも参考になればという意味で、研究動員学徒としての私が参謀本部で一体何をしていったのか、について述べたいと思うのですが、その前に戦時下の学生としての私が、当時どのような状況のもとに置かれていたのかについて、5年ほど前に当時のことを書いた文章（石井 2003）に多少筆を加える形で簡単に触れておくことにします。

私が旧制高校を終えて東京大学の地理学科に入学したのは、1943年10月という戦時下の短縮による変則的な時期で、しかも入学早々従来からの徴兵猶予制度が突然変更になり、同級の文科系学生の友人

たちが根こそぎ軍隊に招集されるという、いわゆる「学徒出陣」世代と同じ学年に属していました。ただし、偶然、東大の地理学科が理科系（京都大学では文科系）に属していたので、私は辛くも招集を免れることになり、卒業まで徴兵を猶予されることになったのです。そしてともかくも最初の一年間は講義や演習が例年通りに継続されていたものの、1944年秋になると地理学科でも正常な授業は困難になってきました。ところが幸運なことに、2年生になったばかりの私たち同級の3名は、主任教授から文部省科学研究費の支給を受け、1944年10月から3ヶ月間当時の満州国辺境の農村調査に派遣されるという貴重な体験をすることになりました（この調査旅行の経過については、石井〔2000〕を参照）。

私がこの調査旅行に参加することになったのは、当時の時局に照応した研究課題として「大東亜における集落の地理学的研究」（辻村太郎東大教授）と「日本人の気候順化に関する研究」（岡田武松中央気象台長）という、両先生をそれぞれ主任研究者とする二つの科学研究費助成金を併せた共同企画の現地調査員として、当時の満州国に派遣する3人の学生のひとりに採用されたからでした。

この研究のねらいは、東亜における諸民族の集落と、日本の内地とは異なった気候を持つ地域での日本人入植村落の生活状態を比較することが目標とされていました。そこで、当時の戦況等から見て、まだ何とか現地調査が可能ではないかと思案された旧満州国の北部を調査地域とし、その中から、1)東北部の佳木斯（チャムース）近傍の日本人開拓村落、2)中北部の黒河（ヘイホー）付近の満州族の村落、3)西北部の海拉爾（ハイラル）の北方に位置する三河地方の白系ロシア人開拓村落、の3地域を調査対象集落として選定し、1)は大貫俊、2)は小堀巖、3)は藤井（石井の旧姓）素介の3人の学生で、それぞれ調査を分担することになったのです。

ここではその村落調査の結果を詳細にわたって述べることはできませんが、私自身の場合の要点を挙げるとすれば、以下のように要約できるでしょう。3ヶ月近い満州旅行中の約3分の1の期間を使い、1944年11月12日から25日間、大興安嶺山地西麓のホロンバイル高原の一角を占める三河地方に入り

込み、ソ連の社会主義革命の動乱を避けて革命後にシベリアのザバイカル地方から集団移住してきた、いわゆるカザック式開拓農民の寒冷地主畜農法と耐寒性に徹した白系露人の生活様式をつぶさに観察し、また村の秋祭りや偶然ある農家の結婚式にも参列する機会を得て、強烈な印象を受けました。その前の予備調査の段階には、ハイラル付近や旧王爺廟（現ウランホト）近傍の定住モンゴル人集落や、豊と障子の住居に固執している日本人開拓団をも訪問し、夫々の生活様式の相違の大きさに驚きました。

それらと同時に他面では、ほんの瞥見に過ぎませんが、“五族協和”という「満洲国」の理想の旗印とは裏腹に、実際には関東軍のいわゆる「内面指導」の下に徹底的に抑えられているこの国の行政の実態や、地域住民との人間的なつながりを持ち、政治の圧力との板ばさみに置かれて苦勞している出先機関の日本人行政官たちの献身的な姿など、「大日本帝国」の植民地支配の多面的な実状にも触れて、忘れることのできない強い衝撃を受けました。

歩み始めたばかりの研究者の卵として、このような強烈な体験をした調査旅行から帰国したのは、1945年の1月初めになってからのことで、東京はすでに連夜空襲警報に脅かされる戦局になっていました。とはいっても、たしかに日常的に空襲と生活物資不足の問題に悩まされてはいたものの、少なくとも2月から3月上旬の頃までは、大学構内においてだけは比較的平穏な状態が保たれていました。しかし3月10日の東京下町大空襲を経て、3月末頃になるといよいよ情勢が緊迫し、理科系学生にも動員令がかかってくる情勢になりました。

そこでいよいよ1945年の4月から、同じ地理学教室の学生3人と共に私が動員先として割り当てられたのが、陸軍の中枢部である参謀本部第二部第七課であったのです。同じ参謀本部の中でも「作戦」担当の第一部とは異なり、この第二部は「兵要地誌」関係の情報担当なのだと言われ、第六課はソ連、第七課は中国というように担当地域が分かれているようでした。「地誌」の調査に地理学専攻学生の知識を役立てようというのが、ここに動員学徒を割り当てることになった理由だったのではないかと思います。

す。

勤務先は、元陸軍士官学校が置かれていた市谷台の大本営陸軍部の中にあり、銃剣で武装した門衛兵の前を大学の角帽と学生服に腕章を巻き、身分証明書を見せながら毎朝通勤しました。第七課の室は一階の大部屋で、軍人・軍属・事務員などが入れ混ざって机を並べる事務室のような場所でした。参謀肩章を着けた高級将校は別室にいたようですが、在室の軍人も将校ばかりで、少数の下士官以外に一般の兵士はほとんど姿を見せず、話に聞いていた様な厳しい軍隊内の雰囲気はあまり経験しませんでした。また戦争末期の特別の緊張感というものなどあまり感じられず、例えば、身近の机にいた若い少佐などは、これから受ける陸軍大学校に行くための受験勉強に余念が無いという様子でした。昼食時になると動員学生は下士官食堂で食事をとることになっており、夕方になれば電車で帰宅するという生活でした。たまに空襲警報が鳴ると、全員で構内にある深い地下壕の奥の待避所へ歩いて行き、警報が解除になるまで壁沿いのベンチに腰掛けて新聞や雑談で時間を過ごすという状態でした。4月・5月のたび重なる東京の夜間大空襲でも大本営は無事だったらしく、結局、終戦になるまで参謀本部には爆弾も焼夷弾も落ちなかったようでした。他方、それにひきかえ私自身のほうは、5月25日夜の空襲で千駄ヶ谷の下宿を焼け出され、神宮外苑付近の火炎をくぐって中央線のガード下まで自転車で逃げ延びて一夜を過ごしたのですが、蔵書や調査資料など持ち物一切を失いました。

ところで、第七課で与えられた仕事の内容は、主に各種の地誌資料を調べて会議説明用の地図・図表を作成するための準備資料を用意するという類いの机上作業でした。私自身が命じられた仕事としては、結局、3ヵ月半の勤務中を通じて次の2つの課題が与えられたのですが、それは、1)「武漢反攻関連地区主要河川輸送能力判断表の作成」、2)「西北支那諸民族調査資料の作成」という作業でした。

幸いなことに、当時作業用に使用したメモ書きや試作一覧表等をひとまとめにした資料綴を入れた袋が、自宅の書庫に保存されていたのを最近発見したので、これに拠りながらそれぞれの内容を具体的に挙げて

みることにしましょう。

まず前者、すなわち1)「武漢反攻関連地区主要河川輸送能力判断表の作成」という課題の方は、揚子江上流（本来は「長江」のはずですが、軍ではこれを使用していました）（漢口－重慶－叙州）、江北地区・漢水（漢口－漢中）、江南地区・湘水（岳州－長沙－零陵）、資江（益陽－武岡－新寧）・（常德－鎮遠－秀山方面）・（慈利－桑植方面）、江西地区（九江－南昌－吉安方面）等、武漢地区周辺諸河川の主要河港区間を対象として、それらの区間距離、航行所要日数（汽船・民船別、上航・下航別）、一往復所要日数（揚搭日数加算）、船舶数（汽船は増水・減水期別）、一隻平均屯数、最大可航屯数（増・減水期別）、一日平均輸送量（推定）等の項目についてのデータを一覧表にせよ、という課題です。

データ算定に使用した資料としては、水路部作成距離表（1937年5月）、「奥地主要水路輸送力調査」（支参地、1942年10月）、「湖南省兵要地誌概説」（1943年8月）、『支那の航運』（東亜海運社、1943年10月）、「江西省兵要地誌概説」（1943年12月）、「揚子江・漢水・湘江・洞庭湖輸送力調査表」（大陸第七課作成）、「揚子江流域五十万分の一水運地誌図」（大陸第七課作成、1945年）等の資料が利用されています。これらの資料は、多分第七課室内の書架在庫のものを利用したのだと思われます。データは推定のもが多く、「船舶数ハ資料ニオケル現在数ノ約半数ヲ収集可能ト認メ之ヲ取レリ」などと注記されている例からも、その精度の適当さの程度が推測されます。

全体として利用した資料の源泉である各種のデータそのものが、他の資料からの孫引きの場合が多く、作成に手間がかかる割には精度の低い粗雑なものに過ぎないな、などと思いながら計算していた記憶があります。主題の「武漢反攻」という語句が何を意味していたのか記憶がないのですが、当時日本軍が占領していた武漢地区に向かって重慶や南方から反攻してくる敵軍の反攻規模・速度等を判定するためだったのか、それともわが軍の撤退の場合の水運利用効率を判定するためだったのか、わかりませんが、いずれにしても終戦直前のこの期になって、こんな杜撰なデータで大丈夫なのかなと半信半疑の作業だったのは間違いありません。もちろん、われわれ動

員学徒などに割り当てられた仕事が中枢的な重要課題であるはずはなく、多分それ以外の重要度の低いものだったのでしょうか、漢語主体の文語文で、報告の最後は必ず「判決（結論の意）」で締めくくるといふ、いかめしい文章の割にしてはやや内容空疎な軍隊特有の報告書類には、いささかならず辟易させられたものでした。

次に後者、2)「西北支那諸民族調査資料の作成」という課題の方は、もっと漠然とした課題で、西北支那、つまり西安や延安よりも西北方の陝西省・甘肅省・寧夏省・青海省・新疆省の中国各省、および蒙疆・外蒙・満洲国を含む地域を対象に、各地域に住む諸民族の種別ごとに、人口数、主たる分布地域、宗教事情、生業、言語、その他衣食住・民族性の特徴や政治的変遷等の統治事情等々に関する特徴を、各種文献資料から要約して一覧表を作成せよ、というものでした。

民族の種別としては、漢族、満州族の他、回教徒（漢回族 [いわゆる東干トンガン]・纏回族・土爾其族）、蒙古族（ハルハ・ブリヤート・オイラート・デュルベツト・その他の各種族）、西藏族（州により細分）、蕃族、その他を区分するもので、新疆省（東トルキスタン）では、ウイグル・キルギズ・カザック・トンガン・タタール・タジック・白系露人まで区別されていました。また一部旧ソ連領の中央アジア諸国の民族構成についても調査対象に入っていました。

これらの調査項目についての主要な情報源としては、東亜同文会編『新支那年鑑』各年版、東亜同文会編『新修支那省別全誌』のシリーズ、『ソ連年鑑』（1940年版）等一般的な基礎資料のほか、満鉄・竹内義典『新疆の民族』（?年）、小林徳氏研究資料（?）、鳥居龍蔵『苗族調査報告』（民国25年）なども利用されています。

もともと陸軍の「仮想敵国」であったソ連軍については研究を重ね、綿密な作戦計画を立てていた参謀本部にも、「対中国戦争についての本格的作戦計画は存在しなかった」らしく、それは中国の国内情勢が国民政府と中共軍に分断されている上に、各地に軍閥や匪賊が群雄割拠する状態であって、近代的統一国家であるとは認めず、恐れるに足りないのだ

という陸軍首脳部の中国人蔑視を含む現状認識によるものだったようです（藤原 2006、28 頁以下参照）。そのためであったのかもしれませんが、中国の他の地域の場合に比べ、とりわけソ連に向かって最前線の位置に当たる西北支那地域の兵要地誌や在住諸民族に関する各種資料が多数書棚に並んでいたようで、当時の作業に使用したメモ書きの中に、利用した西北民族資料の一覧表が記載されていました。

参考のために一部列記しておく、以下の通りです。

- a. 「内蒙兵要地誌綴（其五）」
- b. 「西北支兵要地誌調査資料（寧夏・オールドス）第八編統治資料」
- c. 「同（熱北・シリングル）民族分布要図」
- d. 「伊克昭盟兵要地誌資料・住民」
- e. 「オールドス・伊盟兵要地誌資料・住民」
- f. 「陝西省政治経済調査（政治篇）」（華北交通・富永機関、1945年1月）
- g. 「第四次西北調・其二：漢回蒙蔵統治要領」
- h. 「第四次西北調・中亜概況：ソ連領中央亜細亜ノ産業概況ト民心動向」
- i. 「西北情勢判断資料：西北統治要領」
- j. 「西北情勢判断資料：別冊付図」
 1. 西北民族統治要領概見図
 2. 西北民族現状概見図
 3. 西北民族分布概見図
 4. 甘肅省民族別人口分布概見図
 5. 西北民族確執概見図
 6. 新疆省民族分布概見図
 7. トルコ民族分布概見図
 8. 新疆省ニ及スソ・英・支ノ支配力概見図
 9. 青海省民族分布概見図

以上。

以上の資料には精粗様々なものがあり、『新修支那省別全誌』や『新支那年鑑』など、東亜同文会の永年の研究蓄積の収録された資料のように、読んでみて教えられることの多い水準の高い資料もあれば、客観的な根拠も示さず独断と偏見に陥っているのではないかと疑念を抱かせる類の資料もありました。

これらの資料を利用して作成した成果として、大判の中国大陸の地図の上に、屯数別可航水路や民族分布状況などを色彩別に区分して書き入れた成果図を作成した記憶があるのですが、それがどのように活用されたのか、利用されない内に終戦になってし

まったのか、その辺のことは記憶に残っていません。ただ、幸いそれらの準備過程で軍用罫紙にメモ書きした手づくり資料集を保存していたので、それらに基づいて上記のような作業内容を何とか復元し記録することが可能となったわけです。

1945年の6月ごろになると職場での雑談から各地での戦況の不利が断片的に聞こえてくるようになります。その頃、多分6月中旬の頃、地誌班の一部が駿河台の明治大学校舎に移動させられました。どういう事情で移転することになったのかその理由は不明ですが、明大では旧記念館の向かって左側の4階部分が軍に接収されていたように記憶しています。それから終戦までの約2ヶ月ほど毎日ここに通勤していたわけですが、その辺りの出来事はあまり記憶に残っておりません。

はっきりと覚えているのは8月14日以降のことです。その日、「午後市谷台の方へ全員集合するように」との緊急指令が出され、何かと思いつつ仲間と電車でそこへ駆けつけました。真夏の暑い日だったと思いますが、大本営の中庭にわれわれ大勢が集まったところで、第二部長だった有末精三中将が壇上から声涙共に下る一場の訓示をされました。その内容は殆んど覚えていないのですが、次のような部分だけは、はっきりと記憶に刻まれています。すなわち、「本日昼過ぎの御前会議で、ポツダム宣言の受諾が決定された。明15日の正午に陛下の詔勅が放送される予定である」、「一週間か10日の内には、この大本営を占領軍に引き渡さねばならぬ。そのため不必要物の焼却処分等、庁舎内の整理に早速取り掛かって貰いたい」、「動員学徒の諸君には特に言っておきたい。日本が米英との戦いに遅れをとったのは、何よりも科学技術の力の格差が大きかったことである。諸君はこの事を肝に銘じて戦後日本の再建のために努力して欲しい」等々。これは、それから10日余の後、厚木飛行場でマッカーサー元帥を出迎える日本側代表になった有末中將自身の、本心そのものだったのではないかと、今でも思っています。

何しろ正式終戦の前日のことなので、御茶ノ水へ帰る電車の中でも「日本が負けた」ことなどおくびにも出せず、口を結んで駿河台に戻りました。その

日は夕方から早速書類の整理焼却に取り掛かることになったわけです。山のように積み上げた書類の焼却処分に取り掛ったのは、現在錦華公園になっている場所辺りでしたが、長い竹竿でかき回してもなかなか書類が焼けなかったこと、既に焼け野原になっていた神保町・猿楽町辺りを越えて水道橋駅まで夕陽の中に良く見通せたのが印象として残っています。翌8月15日正午の終戦詔勅の放送は、明大校舎本館南側1階にあった半円形の階段教室に集合して聞いたのですが、内容はほとんど聞き取れませんでした。

明大校舎での勤務はその日で終わり、その後の3日間は市谷台の方の整理作業に従事しました。驚いたことに8月16日以降は、大本営入り口の門衛兵が不在となり出入りが全く自由になりました。焼却の煙は各所で上がっていましたが処理が間に合わず、第二部各課の隅に焼却可の書類が積み上げられました。整理の仕事はそれからまだ数日を要したようですが、動員学徒は占領軍に責任を問われないように8月17日をもって動員解除とする、という事になり、同日の夕刻大本営の門を退出しました。

以上は、参謀本部における研究動員学徒としての4ヶ月足らずの体験のあらましを述べたものです。これは、あくまでも現在の時点からの回想であって、その当時私が何をどのように考えながら暮らしていたのか、については何とも言いようがありません。何とでも言えるような気もするのですが、これはまさに『玉ねぎの皮をむきながら』(グラス 2008)の話と同じで、記録や自分の行動で推測する以外に良い方法はない、と言えるのではないのでしょうか。

ただ、当時、私が垣間見た日本軍、いわゆる「皇軍」における「兵要地誌」なるものの性格や位置づけとその取り扱い方について、ここで一言しておきたいと思います。

前記のように、「西北支那諸民族」に関する列記資料の中には、a～eのようにはっきりと「兵要地誌」と題した資料や、軍のいわゆる特務機関による政治動向調査(f)、「統治要領」・「民心動向」の調査(g・h・i)など、軍自体が作成した「兵要地誌」的な資

料が多数含まれています。これらの内容を見れば、軍が作戦立案のために必要とする情報源としての「兵要地誌」なるものの性格がどのようなものであったのか、をある程度うかがうことができるでしょう。

例えば、「陝西省政治経済調査」(f)からの抜書きを見ると、「コノ省ニオケル政治的形態ハ重慶ノ三民主義ト延安ノ新民主主義トノ鋭キ対立ヲ以ッテ表現セラル」と的確な指摘をした上で、孫文以来の三民主義と中共の新民主主義の内容、また中共の民族理論や対回民工作・対東干領導方策等について詳しく解説を加えています。特に治安状況については、「閩中地区ノミニテモ民国以来歴年ノ内乱ニヨリ民間ニ流散セル武器ハ極メテ多数ニシテ」、「民間武装ノ侮ル可カラザルヲ知ルベシ。特ニ最近ハコノ民間武力ニ注目シテ之ヲ抗戦ノ一翼ニセシムベク當路者ニ於イテ躍起ノ工作ヲ為シアル模様ナレバ萬一ノ場合ニオケル民間ゲリラ戦ノ活発ヲモ考慮スベシ」と、仮想敵国に対する作戦を準備策定するに当たっての要点を鋭く指摘しています。

これに対して、諸民族に関する調査の分野になると、諸民族の生活の実態を客観的に究明するというよりも、作戦計画のための「宣撫工作」あるいは「諜報工作」における、それら諸民族の適否やその「利用価値」というような面に焦点を向けた「即戦力」的な側面に関するものが多いことに気付かされます。とりわけ諸民族の「特性」に関する記述においては、例えば、保守勤勉、勇敢精強、剽悍尚武、民情純朴、従順質素、忍耐力、貯蓄心等々の称揚語や、頑迷固陋、軽挙妄動、付和雷同、優柔不断、暗愚粗野、狡猾敏捷、金銭打算、排他心、無気力等々の侮蔑語を散りばめた一方的な評価を加えた上で、いきなり「服従追随ヲ期待シテ可ナリ」とか「利用価値大ナリ」とかの判断を下してしまうような記述には、上述のように終戦前年の暮れに旧満州国で体験した異民族の生活実態観察を想起するにつけても、むしろ強烈な違和感を禁じ得ません。

以上に述べた観察は、いわゆる「兵要地誌」の中のほんの一部分を取り上げたものに過ぎませんが、それにしても、これらが客観的な情勢判断の根拠としてどの程度使いものになり得たのかどうか、疑問

を感じざるを得ないでしょう。

本来、万一の緊急事態発生を想定して戦争の危険に備えるのが国防であり、関係地域の実態を分析して国防に役立つ情報を提供するのが「兵要地誌」の役割であったとするなら、上記のような内容の記述が、はたして本来の兵要地誌の名に値するものと言えるでしょうか。またそれとは逆に、この程度の内容のものが「兵要地誌」であるとしても、これが実際の作戦実行に際してはたして信頼に足る情報とされたのかどうか疑がわしいものだし、またこのような内容のどこに地理学が協力できる余地があったと言えるのでしょうか。むしろ元来日本の軍隊が、真に科学的分析を積み重ねた信頼できる兵要地誌に基づきつつ作戦計画を立てて実行に向かうという体制を、一体まともに確立していたのかどうか、またそういう意図がどの程度あったのかという問題の方をこそ、本格的に検討し直してみる必要があるのではないのでしょうか。少なくともこの点は、今後に残された重要な検討課題であろうと思います。

さらに、軍事への地理学の協力関係の問題を考えるに当たっては、兵要地誌の場合のように直接軍事に係わる分野に限らず、もう少し視野を広げて国際的な安全保障や国際協力・途上国援助の分野、あるいは国内の場合でも地域開発・環境保全・街づくり等の分野など、政府や自治体の担当する公共的政策の立案に際して、地理学的な視点・方法からの研究成果が役立つ可能性を持つ領域が少なからず存在するのではないかと思われます。そうした場合に地理学の果たすべき実践的役割、すなわち、いわゆる応用地理学の分野がそれに当たるでしょう。諸外国に比べて日本の地理学界では、この応用地理学の分野を本格的に取り上げた研究は未だあまり多くないようですが、今から40年ほど前に、私はこの分野の研究に着手する場合に心すべき問題に言及し、資源論と日米の資源政策について批判的検討を行ったことがあります(石井[1969]、これはほぼそのまま石井[2007: 154-165]に再録)。

そこでは、地理学者がこうした応用課題の研究に取り組むに当たっての姿勢の問題、つまり研究者としての社会的責任についての自省如何を問題にしてい

ます。すなわち「科学が客観的真理を追究するものである以上、それは政策的実践と厳密に区別されねばならない。しかし科学と実践とは無関係ではない。科学によって究明された成果は、これが実践的に応用される場合に判断を下す客観的基礎となる（逆にその信頼性を試されることにもなる）。従って「政策そのものを研究の対象とする政策論の課題は、自から政策を立案することではなく、批判的にその成否・功罪を究明し、冷厳な政治経済の法則性がそこに貫いている点を示すことにある。そのことによってのみ、政策立案者に正しい科学的根拠を提供し得る」のであって、その政策立案者に「奉仕＝妥協する立場からではなく、逆に客観的・批判的な立場から問題を究明することによってこそ、かえって真に応用科学たり得るのである。この点を曖昧にしたままで応用課題に取り組むことは、科学的武器を磨くどころか、科学としての地理学の（信頼性を傷付け）墮落を招くことにもなりかねないであろう」と書いています。

これは政策科学の一翼をになう応用地理学の立場にも当然共通するキーポイントであり、かつての「兵要地誌」のあり方についての歴史的な批判・検討を行う場合や、これに対する当時の地理学者の協力の仕方についての検証という問題を取り上げる場合にも、研究者として充分に心しておくべき点を含んでいるのではないかと考えて、敢えて引用させていただいたものです。

また特に後者の問題、つまり地理学者の戦争協力についての検証という問題を取り上げるに当たっては、短絡的な結論を急がず、慎重な取り組みが望まれます。それは、言うなれば「不本意ながら」、事実上他国への侵略戦争に邁進する祖国に生活の基盤を置くことになってしまった当時の研究者たちが、やむを得ずとらざるを得なかった祖国への奉仕の姿勢と、その中に込められた人間としてのささやかな消極的抵抗とを、少なくとも包括的かつ複眼的に把えようという視点が必要とされるのではないかと考えるからです。実はこの問題は、終戦を挟んで戦後を生きている私たちにとっても、決して他人事では済まされない問題です。すなわち、無謀な戦争を惹き

起こした戦時下のこの国に暮らしていた日本人と、戦後を生きる日本人とは、否応無しに明治以来の日本の近代史・現代史を踏まえて生きている共通の責任を背負っているのだからです。

日本の近代史を突き動かしてきた諸要因は、決して終戦の時点で突然解消されてしまったわけではないはずなのに、私たちの胸の中には、何となく戦後の混乱の中で、「軍国主義」の船から救助に来た「民主主義」の船にポンと跳び移ったかのような安堵感が無意識のまま潜在し続けており、それがいまだに、あれで良かったのだろうかという「終戦時のけじめ」の曖昧さへの違和感を、いまだに引きずらせ続けているような気がしてならないのです。

それと同様な意味で、終戦の直前に有末中将がはっきりと述べていたように、戦争遂行に当たって「科学技術」的判断を軽視し、その力の日米格差を無視したまま精神力の鼓吹のみに執着してきた「皇軍」の伝統は、程度の差こそあれ戦後日本の国土開発行政をしゃにむに推進してきた中央集権官僚システムの「伝統的」手法として、形を変えて継承されているのではないのでしょうか。

これに対して、かつてノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎氏は、「政治家、科学者、技術者の最も美しい協力の例」として、1932年に完成したオランダのゾイデル海のダム（締め切り堤防）の建設計画に際して「ローレンツ委員会」の果たした役割について紹介しています。1916年1月の高潮でアムステルダム近傍の洪水被害を受けた同国では、ゾイデル海の入り口をダムでふさぐ大計画を立てたのですが、ダムによる潮位変動の予想値に諸説が出て紛糾し、政府は1918年潮位予測の検討委員会を設け、その委員長に有名な理論物理学者のH. A. ローレンツを指名しました。委員会の研究活動は多数の験潮儀設置から始まり、浅海湾への潮流出入りの数値解析モデルとその各種地形海湾での4年間に及ぶ数値実測との照合検証を行い、続いて北海沿岸の暴風高潮の場合の予測潮位計算には、さらに4年間の年月を要し、ようやく1926年に最終報告を女王に提出したのでした。そのおかげで国土の沿岸を護る防潮堤の高さは当初の予想をはるかに下回り、工事期間も4

年短縮されて竣功したのですが、その後何度も襲ってきた高潮の潮位は、ローレンツ委員会の計算値と驚くほど一致したと言われています。

朝永氏はこの委員会活動からの教訓として、その驚くべき徹底した科学性と諸分野の科学技術者間の協力体制、また 8 年間に及ぶ理論的・実験的な研究の徹底振りを許した政治家の識見・度量と科学者への信頼感の大きさを挙げています。その上で、最後に「わが国のいろいろな開発計画は現在でもなお、(こうした計算し尽くした予測に基づくやり方でなく) 言わば“暗闇へのジャンプ”方式でやっているように思われてならないが、これがもしまちがいであれば幸である」と結んでいます(以上の逸話の詳細は、朝永 [1960, 2000: 196-207] を参照)。

このような先進的な外国の実例と対照させて、政治・軍事と学問との関係を考えてみると、日本の場合、もちろん応用科学の側の力不足の問題もあるでしょうが、それと同時に、むしろ学問の力に信頼を置いてこれを活用することを頭から尊重しようとしなかった戦前以来の政治のあり方、軍事のあり方の方に、より深刻な問題が伏在しているのではないかと痛感されるのです。こうした日本社会の基底に現在なお存続している基礎的な問題との関連への配慮を欠落させたままで、日本における兵要地誌のあり方や地理学者の軍部への協力関係についての現象面のみに着目する研究に向かうとするなら、やはり強い疑念を抱かざるを得ないことになるでしょう。

(2008年9月3日稿)

注

1) (編者注) 源 (2007) に渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 (2005) に収録されている久武哲也氏の解説が引用

されている。

文献

- 石井素介 1969. 資源開発論・資源政策の変遷. 朝倉地理学講座編集委員会編『応用地理学』104-132. 朝倉書店.
- 石井(藤井)素介 2000. 三河紀行素描—戦時下の旧北満辺境調査旅行日誌—. 空間・社会・地理思想 5: 62-75.
- 石井素介 2003. 帰去来兮. 季刊『明治』20号.
- 石井素介 2007. 『国土保全の思想—日本の国土利用はこれでよいのか—』古今書院.
- 岡本次郎 2008. 外邦図の東北大学への搬入経緯をめぐって. 外邦図研究ニューズレター 5: 39-48.
- グラス, G. 著・依岡隆児訳 2008. 『玉ねぎの皮をむきながら』集英社.
- 佐藤 久 2005. 地図と空中写真、見聞談—敗戦時とその後—. 外邦図研究ニューズレター 3: 61-71.
- 佐藤 久 2006. 地図と空中写真、見聞談—敗戦時とその後(続)—. 外邦図研究ニューズレター 4: 45-68.
- 朝永振一郎 1960. ゴイデル海の水防とローレンツ. 自然 15(1): 3-5.
- 朝永振一郎著・江沢 洋編 2000. 『科学者の自由な楽園』岩波書店(岩波文庫).
- 中野尊正 2004. 外邦図と私とのかかわり. 外邦図研究ニューズレター 2: 50-53.
- 藤原 彰 2006. 『天皇の軍隊と日中戦争』大月書店.
- 三井嘉都夫 2004. 私と外邦図. 外邦図研究ニューズレター 2: 46-49.
- 源 昌久 2007. 英国海軍情報部作成の Geographical Handbook Series に関する一考察—China Proper を中心に—. 空間・社会・地理思想 11: 2-18.
- 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編 2005. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集—』大阪大学文学研究科人文地理学教室.